

ここに一つの理屈(意見)がある。

「どんな事情があるにせよ、立った以上、  
西郷は何百何千の将兵達の命を預った一軍の将なのである。

第二維新を思うのであれば、勝ち負けはともかく、  
将兵のためにも国のためにも勝つことに全力を尽くさなくてはいけないのではないか。

しかし、このときの西郷には、なりふり構わず全力で勝ちにいった形跡は感じられない。

桐野まかせの印象なのである。

桐野はいい男であり、勇敢な部隊長ではあるが、大将の器とは思えない。

その程度のことは西郷は知っていたはずである。  
知っていて放任した。

本人はいい、しかし、彼の“能力”を信じ、勝つ気でいた将兵達からすれば、いい面の皮である……」

この理屈(意見)、「魅力」というカテゴリーに入るとまるで無力化してしまう。

増田の言う、理屈では割り切れないというところを、  
ある雑誌の西郷論(大橋武夫氏)の中でわかり易く解説されている箇所があったので紹介したい。

「この戦いにおいて、西郷は約二万人の郷土の若者を死傷させている。

ところが、その父兄子孫から非難の声があがらないばかりか、  
逆に非難するものを怒るとはどういうことだろう。

かつて城山を訪ねたとき、私はふと二・二六事件のことを思い出していた。

当時事件の渦心の近くで、  
その経緯を見ていた私としては一番腹立たしかった、  
「大人はずるい」という実感である。

最初に若者に呼びかけて事件を発動させたのは年輩者である。  
そして陣頭指揮をし、一台のバスに乗ったように一団となって突進する。

ところが、バスが暴走状態になり、  
前途に危険を感じるようになると、  
それまで運転していた指導者達は、ハンドルを捨てて、  
密かに飛び降りてしまうのである。

残された若者達は悲惨である。  
運転手がいなくなったのも知らないで、  
暴走するバスのスピードに喝采を叫び、  
シュプレヒコールなどで景気をつけているうちに、谷底に転落してしまう。

私は、こうした実例をいやというほど見せつけられてきた。

その点、西郷は違っていた。  
弟子達が、政府側の誘いに乗って鎮台の火薬庫を襲った時、  
「しもた」と叫んだと言われるが、  
戦いの緒端が開かれると、若者達だけで行かせてはならないと、  
自分もバスに乗り、  
一番後方の座席に座り続けて最後まで降りようとはしなかった。  
弟子達と情死したといわれる所以である。

郷士の父兄としては

「乱暴な若者達によくぞ最後までついて行って下さった」という気持ちこそあれ、  
非難する気持ちにはなれないのかも知れない。(下線部分、筆者追補)」